

原 ゆかり

はら・ゆかり 愛媛県出身。(株)SKYAH CEO、ガーナNGO法人 MY DREAM. org共同代表。2009年に東京外国語大学卒業後、外務省に入省。在職中にNGO法人MY DREAM. orgを設立。'15年に外務省を退職。三井物産ヨハネスブルク支店に勤務しながらNGO活動を継続。'18年三井物産を退職し、アフリカ企業を経て現職。
https://proudlyfromafrica.com

「将来的には『ゆかりはもう来なくていい』といわれることが目標で、8年経った今はほとんど現地のスタッフで動かしています。もともと彼らは新しいことにチャレンジするのに躊躇がなく、失敗しても簡単には折れないレジリエンスが非常に高い。そうした彼らの生き方から刺激をもらい、人生の方向付けを私の方がしてもらったと感じています」

レジリエンスとは、日本や世界のビジネス、教育でもキーワードとなっている回復力や粘り強さ、



現地の人の折れない心に助けられている

しなやかさなどを表す言葉だ。2020年の世界の状況に原さんが落ち込んだ時にも、「ゆかりが心配しても何も変わらない。今できること、新しいことをやろう!」と言ってくれたのも現地の人たちだった。

ボナイリ村の収入確保の手段として始めたのが「ものづくり」だった。付加価値をつけるために、縫製なら品質を高める指導をしたり、シアバターなど伝統的に生産してきた原材料は国内のおしゃれなコスメブランドと提携したりするなどして、先進国でも売れるものが作れるようになってきた。

現在はNGOとは別に、SKYAH(スカイヤー)という会社を立ち上げ、オンラインショップ「Proudly from Africa」でアフリカ発の高品質でサステナブルなファッションアイテムなどを日本に紹介・販売している。織研新聞社が主催する展示会「プラグイン」に2020年10月に出張し、来場者による人気投票で見事グラプリを受賞した。

将来的にMY DREAM. orgでものづくりをする人たちの製品をブランド化して「Proudly from Africa」で販売できるようにすることも、ボナイリ村の人々のモチベーションとなっている。

「ボナイリ村を底上げするためにはがんばってきた大人の背中を見て育つた子どもたちが、私がやってきた役割を担ってくれるようになっていきます。寄附で始まった支援からの卒業を10年計画で立てており、自立の日は目の前です」

Proudly from Africa で販売している商品。左.100%天然由来、メイド・イン・ガーナにこだわる食品とコスメのブランド「SKIN GOURMET」。右.化学品の染料や素材は一切不使用の「Research Unit」のバッグ。



出会いから8年。
支援のつもりが
人生の方向を
学んできた。

質の高いアフリカ製品を日本に紹介する事業を営む
原ゆかりさん。外務省や大手商社で勤務してきた傍ら、
ガーナ共和国の村の支援を続けてきた原さんの
道のと、アフリカへの想いを伺った。

上.MY DREAM.orgの活動でボナイリ村のお母さんたちとくつろいでいるひととき。下.Proudly from Africa事業で紹介している南アフリカのバッグブランド「Research Unit」のクリエイター。



photo: Keita Sawa text:Yoshiko Nagashima hair & make-up:Mizuki Sato

アフリカへの支援というと、寄附や援助をイメージする人が多いかもしれない。

「私も初めはそうでした。でも与えられるだけの支援を、彼らは求めています。支援の出口として、自立し自ら発展していくことが最終目標です。むしろ彼らから学ぶことの方がずっと多かったです」と原ゆかりさんは語る。

アフリカといっても54カ国もあり、いまだ貧困に苦しむ国がある一方、すでに先進国と肩を並べる経済発展をしている国もある。状況は刻一刻と変化しているのだ。

原さんが外務省勤務時代に出会い、現在までガーナNGO法人・MY DREAM. orgの活動をしているガーナ共和国のボナイリ村は、農業がメインで、村人の収入は年1回の収穫のみ。あとは出稼ぎに行くか内職をするしかなかった。持続可能な収入を得て発展するために何をすればよいかの道筋をとるに考え、ビジネスとして必要な手続きの手助けなどをしてきたのがNGOでの活動だ。